

治 績 の 概 要

南 方 熊 楠

慶応3年4月15日（旧暦。新暦では、5月18日）、南方弥兵衛の次男として和歌山城下橋丁に生まれる。

和歌山中学校卒業後、共立学校を経て明治17年東京大学予備門に入学するも明治19年に退学し、同年12月横浜からアメリカに向かう。明治20年1月にサンフランシスコに上陸し、パシフィック・ビジネス・カレッジ、次いでイーストラッシングのミシガン州立農学校に学ぶも退学し、以後独学で植物学、民俗学を中心に様々な学問を学ぶ。アナーバー、ジャクソンヴィル、キューバを経て、明治25年、ニューヨークから渡英する。

明治26年9月大英博物館の古美術部及び東洋部の部長ウォラストン・フランク스와その助手チャールズ・リードの知遇を得て東洋関係の文物の整理を助け、その利用の便を得る。同年10月、科学雑誌『ネイチャー』に「東洋の星座」を発表し、以後総数で51本の論文が掲載される。明治31年12月まで大英博物館閲覧室を中心に古今東西の書物を筆写するほか、大英自然史博物館図書館、南ケンジントン博物館図書館などロンドンの図書館で筆写した「ロンドン抜書」とよばれるノートは52冊にのぼり、後の著述活動の資料となった。

明治33年に帰国し、同34年に弟常楠が経営する南方酒造の支店がある勝浦に向かう。明治35年1月に那智山の麓、市野々の大阪屋に移り、同37年に那智を離れるまで主に大阪屋に滞在し、植物調査と『ネイチャー』、『ノーツ・アンド・クエリーズ』に投稿するための論文執筆に励む。明治37年中辺路を通り田辺に到着後、昭和16年に亡くなるまでの37年間を田辺で過ごし、田辺から日本、世界に向けて情報を発信した。

明治末期、政府が神社合祀政策を推し進めると、新聞や雑誌に反対意見を投稿するとともに、中央の官僚、大学教授等に書簡で貴重な自然や神社林、史跡の保護を訴えるほか、神島の天然記念物指定に尽力する等自然保護活動を行ったことから、現在では「エコロジーの先駆者」として注目されている。南方熊楠翁が保全を訴えた神社や景勝地は、現在世界文化遺産に登録されており、神社合祀反対運動中に記した『南方二書』、「神社合祀に関する意見」に登場する神島、闘雞神社、継桜王子等13か所は「南方曼陀羅の風景地」として平成27年10月に国の名勝に指定された。

著述では、明治26年の「東洋の星座」を皮切りに、在英時代、那智時代は『ネイチャー』、『ノーツ・アンド・クエリーズ』に投稿するとともに、同37年那智を去る直前から『東洋学芸雑誌』への投稿を開始し、徐々に国内の研究雑誌への投稿が増加する中、大正年間に入ってから国内雑誌への投稿が中心となり、『人類学雑誌』、『太陽』、『大日』、『日本及日本人』等、多数の雑誌に論文を投稿した。明治42年1月、『海南時報』に「鶏の話」を掲載したのを皮切りに新聞への寄稿を開始し、9月には『牟婁新報』に「世界的学者として知られたる南方熊楠君は如何に公園売却事件を見たるか」を発表し、以後、牟婁新報を主な寄稿先として、神社合祀反対の論陣を張る。明治44年からは柳田國男との書簡の往復が始まり、柳田を中心に創立された郷土会（郷土研究会）の機関誌として大正2年に『郷土研究』が刊行されると、論文を寄稿し、草創期の日本民俗学に大きな影響を及ぼした。

植物学の分野では、ほぼ全般的に研究しているが、特に有名なのが変形菌についての研究である。数度にわたって変形菌（粘菌）の目録を発表し、36種しか記録されていなかった日本の変形菌相に178種を追加し、変形菌研究の歴史に大きな名を残している。同じく変形菌を研究されていた昭和天皇の要請により、昭和4年6月の南紀行幸の折、御進講を行い、変形菌をはじめとする田辺近郊産の動植物標本を献上した。後に昭和天皇は、「雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」と南方熊楠翁の名前を詠み込んだ御製を発表された。